

世界をつなぐリーダー育成

ネパール地震の被災地を訪問し、子どもたちの心のケアなどについて話を聞く大学院生ら＝2016年9月、ネパール（熊本大提供）

熊本大（熊本市中央区）が、医学や薬学の専門知識を持ちつつ、九州と世界を結び付けて活躍できる次世代のリーダー育成を目指す「HIGO（ヒゴ）プログラム」を開講している。対象は、医学教育部と薬学教育部の修士・博士課程に在籍する大学院生で、海外でのインターンシップが特徴。プログラム受講をきっかけに起業した卒業生もあり、研究室にこもりがちな大学院生が視野を広げることにつながっている。

熊本大「H I G Oプログラム」

医学、薬学の知識生かす 海外インターンシップ

プログラムは、大学院生に企業や社会への関心を持ってもらおうと、2012年度から始まった。毎年度、留学生も含めて約20人を募集している。

カリキュラムは多彩だ。企業や行政で活躍している人を招いたセミナーや講演のほか、リーダーシップのトレーニング講座も実施。海外でのインターンシップ



H I G Oプログラムを担当する小椋光教授（中央）ら
＝熊本市中央区

に力を入れており、これまでにバングラデシュの製薬会社訪問やフィリピン先住民の健康調査、ネパール地震の被災地を訪問して熊本地震からの復興のヒントを探るフィールドワークなどに取り組んだ。世界各国の文化や宗教などについて学ぶ座学もある。

海外でもためらわずにコミュニケーションが取れる人材を育てるため、カリキュラムは全て英語で実施されている。

プログラムコーディネーターの小椋光教授(62)は「産学連携が進む社会で、大学院にいても社会に関心を持ってほしい」と話す。

これまでにプログラムを修了したのは8人。プログラムを通じて身に付けた英語力を生かして海外の大学の講師になるなど、就職先の幅が広がる効果も表れているという。

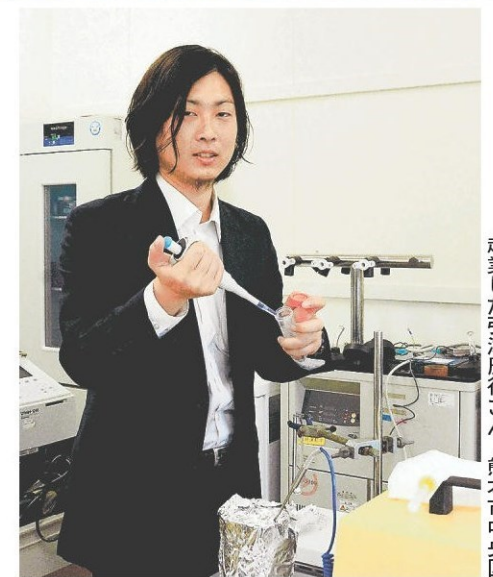
ことし3月にプログラムを修了した弘



津辰徳さん(29)は、在学中にベンチャー企業「CyDing（サイディン）」を設立。4月には同市中央区にオフィス兼研究室を構え、全国の大学から薬品の合成や精製を請け負うようになった。

「海外インターンシップで出会った貿易会社社長の生き生きした姿に憧れて、起業に踏み切った」と弘津さん。「今後、熊本で起業する人の見本になれるように頑張りたい」と意欲を燃やす。

小椋教授は「プログラムを修了して就職した学生が、どういう活躍をしているのかを追跡していく必要がある。その結果、足りないものがあれば臨機応変にカリキュラムを変えて社会の変化に対応していきたい」と話している。（中村悠）



プログラム受講をきっかけに在学中に起業した弘津辰徳さん＝熊本市中央区